

ベルナール＝マリ・コルテス著、佐伯隆幸訳
『西埠頭／タバタバーコルテス戯曲選2』

れんが書房新社、2013年

西 樹 里

きたるべき読者に

2001年に出版された『コルテス戯曲選』から十年余り、やっと、やっと『2』の登場である。待ちわびた。

本書に収録されているのは二作品、西アフリカのどこかの家の中庭、バイクにご執心で遊びに出ようとしないうつと、そんなかれを恥じて、ビールと女の子をひっかけに外へ行けとけしかける姉とを描く、八六年発表の小品『タバタバ』、そして同じく八六年にパトリス・シェローが初演した、ニューヨークの打ち捨てられた倉庫街を舞台にした大作『西埠頭』。いずれも緻密な構成とコルテス独自の劇作法が顕著にあらわれ、いまここで渦まいている「他者」の、『西埠頭』に登場する家族のような、金はもちろん職も食い物も戸籍もない、何も持たないがゆえに語るができない者たちの発する音・ふるえ・においの塊が、読者の身を衝く、たいへんに「物騒な」本なのだ。

と、しかつめらしくわかったふうを書くのはよろしくない気がする。正直言ってこの日本語版はわたしには少しも簡単ではないし、中身の要約などどだい無理、したくない、よって全然書評らしくない「わたし」の回路で少し書くのが精いっぱい。けれども喉元をすすする通り過ぎる性質の本ではないからこそ、いま読まれなければならないと言うべきか。やれ「超訳」やら「何分で読める」シリーズやらが売れに売れ、書物がただの情報として流通し、それをできるだけ大量にかき集めて一分一秒でも早くモノにして使いこなすことを是とする風潮が目立ってしかたないが、書店で平積みにならないうつとこの本は消費されないうつと。否、できないだろう。それほどに手ごわく、噛み砕けないが（だからもう呑める塊から丸呑みしようよ、というのがわたしの意見）、それゆえにはるかな射程を持つ。たとえば本書所収の『西埠頭』にはいくつかのエピグラフが置かれており、巻末の訳注ではその

一つひとつについて出典とあらましが記されているのだが、それを読むだけでもこの戯曲がどれほどの書物を、「歴史」を背負って立っているかがわかろうというものだ。

そういうおそろしい一冊の本があらゆるものを乗り越え引き連れて、わたしの暮らす安アパートの本棚までやってきた。わたしはそれを読んでしまった。だからこれからも繰り返し読む。そうしてふいに、紙の書物というのは希望だ、と思う。ほとんど泣きたくなるような苛烈な希望だと思う。

